



# 丸木舟の時代

びわ湖と古代人

(財)滋賀県文化財保護協会 編

# 目次

発刊にあたって

凡例

## 【特別寄稿】

湖国最初の丸木舟発掘

—水茎内湖干拓地の人々と七隻の丸木舟—

水野正好 15

## 第一部 シンポジウム「丸木舟の時代」

一 縄文時代の丸木舟研究のために

網谷克彦 34

二 琵琶湖周辺の縄文社会—丸木舟の果たした役割—

瀬口眞司 62

三 湖辺の縄文時代遺跡

中村健二 85

四 シンポジウムの論点とまとめ

小竹森直子 112

## 第二部 びわ湖と古代人

一 よみがえる縄文時代の丸木舟

中川 正人 122

二 琵琶湖の漁撈習俗にみる漂泊漁民性

長谷川 嘉和 149

【コラム2】 縄文丸木舟、琵琶湖に漕ぎ出す―復元丸木舟の実験航海―

183

三 琵琶湖周辺における

「丸木舟の時代」の植生

佐々木 尚子・高原 光 186

四 丸木舟から準構造船へ

横田 洋三 201

資料

# 一 縄文時代の丸木舟研究のために

網谷 克彦

網谷と申します。よろしくお願いいたします。

私に与えられました仕事は、「丸木舟」に関する話題を提供しなさいということですので、特に丸木舟の製作という面から若狭湾の丸木舟や民族誌で取り上げられた丸木舟を見て、普遍的な道具として世界各地に存在する丸木舟が世界の中でどんな関心をもって研究されているのか、といった話題を述べさせていただきます。

はじめに―丸木舟研究の現状―

縄文時代の丸木舟が発掘調査で最初に見つかりましたのは、千葉県の加茂遺跡、昭和二十三年のこと、慶応大学の調査でした。それから六十年あまりが経過して、百二十例ぐらいの丸木舟が全国で発見されているようです。この滋賀県でも三十例出ていて、ここ二十年ぐらいでも十例



以上増えたということで、近年至極、事例の集積が進んでおります。

しかし、丸木舟そのものの研究に関しては、昭和二十三年ごろ加茂遺跡を調査され、その後丸木舟研究をなされた慶応大学の清水潤三先生（故人）のお仕事から、それほど進展があるようには見えません。

丸木舟をどのようにしてつくっているのか、どういう工程を経てつくっているのか。それから、われわれは編年と申しますが、時間軸上で形はどう変わっていったのか、もちろん海や川、湖、そういった水域環境に伴っての変化、そんなことも当然あったであろうと思いますし、地域差、例えば関東の丸木舟と琵琶湖の丸木舟はどのくらい違うのかというようなこと、そのような研究はほとんど進展していません。

そういった停滞現象の原因として、丸木舟そのものは、元々が水辺に限定される道具ですから、どこからでも出てくるものではない、ということがあります。もうひとつ、木質のものが保存されるためには、日本では低湿地の遺跡でなければなりません。こうした限定された環境でしか断片的に出てこないのです、たいてい丸木舟は極めて保存の状態がよくありません。壊れていて、あるいは土圧で変形して出てまいります。ですから、形すらわからないことが往々にしてあるのです。

例えば、現時点で一番古そうなのは鳥根大学の構内から出てきた丸木舟です。縄文時代前期の初め、早期の末ぐらいのもので、スギ製ですけれど、これなどは本当に真っ平らな板です。その板の年輪を追いかけいきますと、内割りの板目がきれいに見えてきて、本来は丸木舟であっ

## 二 琵琶湖周辺の縄文社会

— 丸木舟の果たした役割 —

瀬口眞司



はじめに

この報告でお伝えしたいことは三つあります。その三つとは、①私たちの何気ない日々の暮らしは定住生活であること、②この定住生活は縄文時代の人々の工夫のたまものであること、③その工夫の一つとして丸木舟が大きな役割を果たしていたことです。

ところで、縄文時代の丸木舟はおそらく人類が初めて発明した乗り物の一つです。ちなみにみなさんは、博物館や職場にどうやって行かれますか。近所でなければ、バイクや電車・車を利用される方が多いですよ。乗り物がなかったら大変でしょう。日々の暮らしが成り立ちません。

乗り物とは行動範囲を広げたり、移動や運搬を容易にする役割があります。だから、縄文時代に発明された丸木舟もまた、暮らしの中で大きな役割を果たしていたに違いありません。

今回はこの点に注目しながらお話しします。

## 縄文時代とは

縄文時代より前の時代を旧石器時代と呼んでいます（岩宿時代と呼ぶ場合もあります）。

当時の動物の化石（写真1）や人類の道具を勘案すると、その主食はナウマンゾウやオオツノシカと呼ばれる大型獣だったと考えられています。この獣たちは、エサのあるところを探しながら、移動して暮らしていました。

ですから、これを主食にしていた旧石器時代の人も、この獣を追いかけて移動していたようです。彼らの住まい方は獣を追いかけてキャンプを繰り返す生活——遊動生活だったと考えられています。このような暮らしは数十万年続きました。

ところが、約一万二千年前に氷河期が終わって気候が温暖化します。

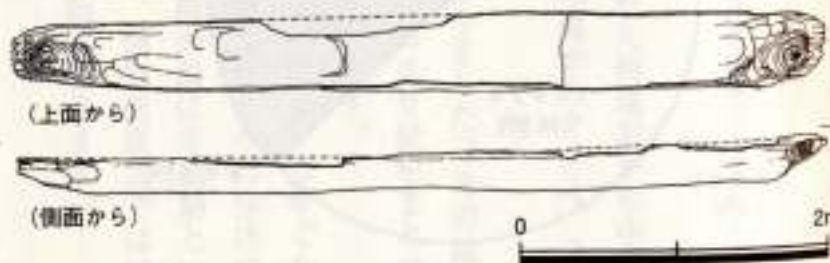


図1 米原市入江内湖遺跡2号丸木舟

## 三 湖辺の縄文時代遺跡

中村 健二



滋賀県文化財保護協会調査整理課の中村と申します。

瀬口さんの軽快なお話のあと、ちよつとゆつくりしたお話になるかもしれませんけれども、お聞きください。

瀬口さんから滋賀県の縄文遺跡についてお話をしていたので、私が話すことはないなど思っているのですが、瀬口さんのお話よりも具体的に、どのような遺跡が水辺にあるのかということを少し紹介しようと思います。

### 琵琶湖辺の遺跡とその特徴

湖辺の遺跡とは、琵琶湖のすぐ側の、琵琶湖から歩いて五分か十分ぐらいのところかなというイメージをお持ちではないでしょうか。琵琶湖辺の遺跡の特徴というのは、画面にも書いていま



すが、最も特徴的なのが湖底遺跡があるということです。湖辺の遺跡を分けると二種類あります。一つ目は、いままも琵琶湖の底に沈んでいる遺跡や、もういま干拓して田んぼになってしまっている旧の内湖付近と言われるところです。二つ目は、先ほどの瀬口さんの発表でいきますと、氾濫平野と言われるような、比較的地下水の豊富なところというもの、琵琶湖辺の遺跡ではないかと思えます。

これらの遺跡にはどんな特徴があるのか。先ほど瀬口さんの発表で、扇状地の遺跡などがありました。扇状地の遺跡と湖辺の遺跡とどう違うかということ、湖辺の遺跡では、土器や石器以外に木器があることです。丸木舟などの木器のほかには、ドンダリ、貝塚などが見つかります。そういった扇状地などの内陸部の遺跡では残らないものが見つかるというのが特徴的です。これ以外に、お墓ですね。お墓から人骨が出土する。当時の人の骨格の復元とか身長も復元もできます。

今日紹介させていただく主な遺跡の位置を図1に示し、表1には、縄文時代の放射性炭素測定法による年代、いまから何年前というおおよっぱな年代をあげています。

北からいきますと、琵琶湖の上の方に葛籠尾崎湖底遺跡というのがあります。縄文時代の早期前半から晩期までの完形土器が、漁師さんの魚捕り用の網で琵琶湖の湖底から引き揚げられている、昔から有名な遺跡です。

東側の対岸付近にいきますと、いま、ちょうど丸木舟が展示されています。湖北町の尾上浜遺跡



図1 関連遺跡位置図

## 四 シンポジウムの論点とまとめ

小竹森 直子

### シンポジウムの論点・テーマの設定

シンポジウムでは、網谷克彦先生による基調講演と当協会瀬口眞司・中村健二両名による事例報告の後、三氏をパネラーとする討論を行いました。その内容については、ここで討論の経過と論点を整理してまとめることによって、紙上再現にかえたいと思います。

約一時間という短い時間の中での意見交換となることから、その論点を明確にして円滑に進行するために三つのテーマを設定しました。第一のテーマは、「丸木舟は、なぜ、どうして作られたのか？」です。ここでは、丸木舟が出現する背景や丸木舟を生み出した動機・契機と植生を主とする自然環境や丸木舟作りに必要な木工技術や石器などの木工具類の変化との間に関連性があるのか、ないのかを探ります。第二のテーマは、「丸木舟は、どう使われたのか？」です。これ



は、運ぶ道具である丸木舟の機能面から丸木舟を評価しようとするテーマです。そして、最後に「丸木舟の役割は何か？」というところで、縄文時代の社会や生産活動などのライフスタイルにおける丸木舟の果たした役割を探るテーマを設定し、討論を進めました。

### 丸木舟は、なぜ、どうして作られたのか

丸木舟作りには、その材料である丸太木材を入手することが必要ですが、どんな種類の木でも良い、というわけではなさそうです。全国から出土した丸木舟の内、樹種が判明しているものを見ると、東日本ではクリ、日本海沿岸地域ではスギ、琵琶湖周辺ではモミが丸木舟の材として多く選ばれています。琵琶湖周辺の遺跡での花粉分析結果からは、縄文時代早期後葉（約六三〇〇年前）には落葉樹林からスギが混じる照葉樹林へと代わり、丸木舟が増加する後期（約三〇〇〇年前）にはスギが急増すると考えられています。モミの状況はあまり良くわかっていません。したがって、琵琶湖周辺の植生環境からは、なぜ、琵琶湖周辺の地域ではモミで丸木舟をつくるのか、といった疑問に対して納得できる説明はできません。ただ、今のところ花粉分析による植生復元が湖辺の低湿地にはほぼ限定されていることから、モミの生育が可能な平野部や扇状地・丘陵地での植生環境の分析・研究が新たな成果をもたらす可能性があり、花粉が残りにくい場所では炭化材での樹種同定が有用な方法となることを中村が紹介しました。

次に、木工技術や木工具の変遷と丸木舟の出現との関連性については、中村からは、丸木舟の

# 一 よみがえる縄文時代の丸木舟

中川 正人



はじめに

中川です。よろしくお願ひします。本日は、梅雨がまだ明けないうち、ようこそ博物館においていただきありがとうございます。まずは、今日の話の進め方を説明していききたいと思います。

今回は、木製品の保存処理ということにポイントを絞って話をしていききたいと思います。話の順序としては、まず最初に、ここ滋賀県立安土城考古博物館にある保存処理施設を含めた出土文化財の整理調査スペースを紹介します。その次に、木材が埋もれてからどういった経過、プロセスを辿るのか、木材の劣化のメカニズムを、また、どんな木の種類でどうして木の種類がわかるのか、木材の樹種鑑定について触れていききたいと思います。

タイトルにもしていますが、「よみがえる縄文時代の丸木舟」では、一九六四年の元水基遺跡

から発掘調査順に長命寺湖底遺跡・松原内湖遺跡・尾上浜遺跡、そして入江内湖遺跡で出土した丸木舟について、その取り上げから保存処理に至るまでの作業内容を説明していきたいと思いません。最後に、保存処理の現状と課題ということで、たくさんの方の木製品を抱える滋賀県が、どのように保存し活用しているかということの専門的なお話になりますが、そういった内容で話を進めていきたいと思えます。

## 保存処理施設の紹介

それでは最初に、保存処理施設の紹介です。ここ滋賀県立安土城考古博物館のなかに、どういった保存処理に関連する施設が用意されているのかをお話していきたいと思えます。

財団法人滋賀県文化財保護協会調査整理課が入っている整理室・製図室では、いろいろな遺跡から出てきた出土品を洗ったり、復元したり、図面を書いたり、写真に撮る準備をしたりして整理しています。室内の作業は、回廊のほうからご覧になれます。

第一収蔵庫は、ここは主に木製品の収蔵庫です。丸木舟が保存処理を待っている状態で並んでいます。丸木舟を保存処理する時には、PEG含浸装置という名のステンレスの大きな機械の中に入れます。大きなもの、丸木舟を一艘丸ごと入れることができます。

本日のお話の中でたびたび出てくるPEGとは、ポリエチレン・グリコールという薬品の頭文字からきた名前で、二十キロ入りのセメント袋みたいな袋に入った工業製品です。PEGを工業

## 二 琵琶湖の漁撈習俗にみる漂泊漁民性

長谷川 嘉 和



ただいまご紹介をいただきました長谷川と申します。なにぶんこういう高い席でお話をすることに慣れておりませんので、ざっぱくなお話しかできないかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

### はじめに

今日は、「琵琶湖の漁撈習俗」というテーマをいただきましたので、琵琶湖の漁撈習俗にみる漂泊漁民性について話をしてみたいと思います。いまでは漁師と言うと、ちゃんとした家をかまえて、そこから魚を捕りに出かけるというイメージを持っておられるかもしれませんが、その前はかなり移動性があった、漂泊性があったということでございます。それが琵琶湖の漁師にも見られるのではないかということを、今日はお話したいと思っております。

というのは、琵琶湖で漁業をやっている人たちの祖先は、すべてとは申しませんが、海で漁業をやっていた人たちが、古代またはある時期に内陸へ入ってきて琵琶湖周辺に住みついたのではないかと、このことを考えてみようというわけです。

琵琶湖総合開発により湖辺の漁撈習俗が大きく変貌する可能性がある。そのために、また古い習俗が残っている間に調査して記録にまとめることになり、昭和五三（一九七八）年度から湖辺の民俗調査を行うことになりました。そこで初めて琵琶湖の漁業、漁港、漁撈習俗といったものに接する機会がございました。私は滋賀県の出身ではありませんので、琵琶湖の漁業についてはまったく知らなかったわけです。

個人的なことになりますが、私は京都と大阪の間の淀川近くで生まれました。明治十七（一八八四）年生まれのお祖父は、別に漁師ではございませんが、魚を捕るのがたいへん好きでした。「ジャコ捕り」と申しておりましたけれども、ジャコ捕りが無類に好きで、その時期になると魚を捕りに出かけます。それも淀川に行くのではなくて、溜池が大小たくさんありまして、そうした溜池で魚を捕っていたようにございます。アンコ（網もんどのこと）とかウナギ針（延縄式の漁）というもので、フナやウナギをつかんでいました。そのほか家には、竹を割って筒状に編んだ筥（かま）や、ガラス製のビン漬、ヤスなどの漁具がありました。

朝起きると、いっぱいフナやコイがいて、家にあるバケツから盥（たらい）から、すべての容器を動員しないと魚が入りきらないというほど捕ってきまして、それを隣近所や親戚へもらってもらわない



### 三 琵琶湖周辺における

## 「丸木舟の時代」の植生

佐々木尚子・高原光

#### 1 琵琶湖周辺の植生とその変化要因

現在の琵琶湖周辺では、南部を中心に市街化が進んでおり、一部には高層建物もみられる。北部では水田や畑が広がり、農山村の景観が残っている。丘陵地や山地に広がる森林の多くはスギ・ヒノキの人工林か、アカマツや落葉広葉樹を中心とした二次林であるが、琵琶湖西方に連なる比良山地では、上部にブナ・スギの天然林も分布している。

琵琶湖周辺に限らず、そこにどのような植物が生育するかには、気温や降水量といった気候、地形や土壌の性質、さらには薪炭の採取や火入れといった人間活動が影響している。植生の大き

な枠組みを決めるもっとも大きな要因は気候である。現在、日本列島のおよそ七割は森林に覆われているが、それは日本列島が多雨な気候のもとにあることによっている。しかし気候はずっと一定なのではなく、数十万年ごとに繰り返す寒冷な氷期と温暖な間氷期の周期がある。この大きな気候変動の周期に対応して、琵琶湖周辺に生育する植物の種類も大きく変化してきた。ここでは、最も近い氷期（最終氷期）の後期の二万五千年前から、氷期が終わった後の温暖期（後氷期）である現在までの、琵琶湖周辺における植生の変化を概観し、縄文時代の人々が暮らした当時の植生を描いてみよう。

## 2 花粉分析による植生復元

花粉分析とは、過去の森林の姿を復元する有効な方法の一つである。多くの植物は、春になると子孫を残すため花をつけ花粉を飛ばすが、雌しべに到達できなかった花粉はそのまま落下する。これらのうち、湖底など酸素の少ない環境に落下した花粉は、分解されず何千年、何万年と堆積していく。湖や湿地の底には、このようにして溜まった花粉が泥や生物の遺骸などとともに積み重なっている。湖や湿地の堆積物には、下の層ほど古く、地表に近い層ほど新しく溜まった花粉が含まれているわけである。花粉分析では、この長期間かけて溜まった堆積物の中から花粉を抽出し、顕微鏡を用いて種類ごとに数を数え、それを基に過去の植生を復元するのである。

## 四 丸木舟から準構造船へ

横田洋三

古墳時代、埴輪に表現された船は図2のような独特の形をしている。舷側板の前後の接合構造が大ききで、このような特徴的な形状をもたらしているのが、視点を転じて、船の下半部に移すとそこにはまだ刳り舟が存在していることに気が付く。この船は丸木舟を土台にして、上部に部材を組み上げて造られた船であることがわかる。古墳時代に活躍し、埴輪にも表現された古代船は単材丸木舟に部材を足して発展してきた船なのである。このように構造体として船底に刳り舟が残っている船を「準構造船」と呼んでいる。

準構造船は近年、実物船の出土例が増えてきておりその実像が見えつつある。なかでも一九八三年大阪府八尾市久宝寺遺跡において出土した古墳時代前期の準構造船は良好な資料で、舳先に組み合わせ加工が施された刳り舟と、これに組まれていた大きな縦板が出土しその構造を見ることができている。刳り舟の幅一・二五メートル以上、縦板の高さ一・八メートルで、長さは三メ